

桑野塾

バフチンの対話、そして広場の思想を研究、実践、さらにアヴァンギャルドの青春を伝え続けてきた桑野隆に惹きつけられた人たちが立ち上げました。教える、教えられるという関係ではなく、バフチンの「広場」のように、さまざまな人たちが出会い、思いや考えを交錯させ、刺激し合う場として不定期で開催しています。

第3回 2010年4月10日(土) 15:00 ~ 17:30 早稲田大学 早稲田キャンパス14号館 804号室

★どなたでもご参加いただけます。★参加は無料です。(懇親会参加は別途)

★終了後、近くの居酒屋で懇親会を開催する予定です。※場所を探す都合上、参加希望者は、事前にご連絡ください。

「タカシマの行方——海を渡ったサーカス芸人のその後」

報告者：大島幹雄（サーカス・プロデューサー／デラシネ通信社代表）



祝祭に彩られていた革命直後のペテルブルグ。

サーカスが陽気なサナトリウムとなり、若き演劇人たちがサーカスと演劇を合体させる実験を繰り返していた1920年にセルゲイ・ラドロフがオープンした「民衆喜劇座」の舞台では、数多くのサーカス芸人たちが出演していた。

この中にひとりの日本人ジャグラーがいた。タカシマである。

メイエルホリドのプレーンのひとりであった演劇評論家ソロヴィヨーフは「銀の花柄のついた青いガウンを着たタカシマの演技は、われわれに深い感動を与える、すばらしいものだった。彼は悲しげに舞台上に立っている。日本語で話しながら、目にもとまらぬ早さで、小刀をあやつってみせた。彼はまだわれわれが知らない、東洋のまぎれもない、みごとな演劇芸術を披露してくれた」と彼の演技を絶賛した。

このタカシマなるジャグラーの正体は、そしてこのあと彼はどこに行ったのか。

さらにタカシマと同じように革命後もソ連に残った日本人サーカス芸人たちの運命は、スターリンによって粛清された日本人サーカス芸人たちについて、そしてその子供たちがつづいたソ連サーカス史に残る奇跡の芸も映像で紹介する。

小展示会 雑誌『三つのオレンジへの恋』・『コメディア・デラルテ』

武隈喜一氏がモスクワ在任時代にオークションで入手した書籍を展示します。

●雑誌『三つのオレンジへの恋』(1914年発行)

メイエルホリドがドクトル・ダペルトゥットとして出していた雑誌『三つのオレンジへの恋』当時1000部しか印刷されてなかった小雑誌が、よく残っていたものだと感心します。

●『コメディア・デラルテ』(1917年?)

コンスタンチン・ミクラシェフスキーの『コメディア・デラルテ』第一部のロシア語版

+DVD上映

ポリシヨイ・サーカス
初来日(1958)
[45分]

※報告者・議題等は変更の可能性もあります。ご了承ください。

問合せ・申込み●大島幹雄 E-mail: IZJ00257@nifty.com 電話: 090-2207-8185